町民文芸

只見短歌会　令和四年一月詠草

我が部屋をそっとのぞきて帰る友後姿の暖かかりし　馬場　八智

遠き日を思ひ起こせば病む母の床擦れ痛む背中（せな）をさすりし　目黒　富子

通院と家事細々と月日過ぐ年賀思ひつ早暮れ迎ふ　関谷登美子

息子（こ）の友の出したる本を読みをれば引き込まれをり忽ちに読む　新国由紀子

吹雪く中除雪しながら国道を作業する人らのみな白くして　渡部ヨリ子

わが家の近くにありし火の見櫓いま片されて幼等遊ぶ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　一月定例会

日高俊平太　指導

冬の日のしみじみ仰ぐ空に蓋　味代子

消雪のパイプはじけて冬ざるる　恒夫

初読みやカタカナ文字を齧りつつ　弘子

主のなき賀状の主の癖字かな　礼

添え書きに今年限りと賀状受く　冬うらら染め上りたる木の葉染め

またひとつ未知の災い虎落笛　裸も用意の一つ軒に吊る　一恵

持ちよりの料理あれこれ年忘　一穂

着ぶくれてカメラ構える只見線　久しくに村に男の子や寒の飴

コーヒーを飲みながら見る雪の峰　屋根の雪見上げているよ寒九雨　真理子

除雪車は今日二回来て夫は囲碁　修一

初雪や夕げのしたく湯気浴びて　寒木や全てを晒す覚悟あり

空っ風に飛ばされそうな通学児　睦子　日めくりの薄さにさらに一めくり　幸生

われにも煩悩百八の鐘待ちにけり　冬帝に真っ向挑む米寿かな

現世（うつしよ）の遠ざかりゆく焚火かな　紺青　くらししの角研ぐ刻か冬三日月　信

初雪や百名山の飯豊山　箱根路に母校の校歌冬の朝

クリスマス孫に見せたき部屋飾り　妙子　在りし日の友の笑顔や年の暮れ　都

指先を広げて桶にニシン漬け

冬休み子等集う日の昼支度